

《教育長メッセージ 第36号》



『先が見えたら』

先が見えたら、こんなに苦勞しなくても大丈夫なのに。
先が見えたら、こんなにも不安にならなくて済むのに。
子どもたちを見ていて、時々、そう思うことがあります。

もちろん、苦勞して物事をやり遂げることや集団とのつながりの中で不安を解消する力を身につけることが、教育のねらいのひとつではあるのですが、そう思うのです。

教育は、目標を定めて計画的に行うものです。

国は、教育内容を学習指導要領として示します。

学校は、学校教育目標を定め、その達成のために教育活動を展開します。

それらの目標の設定や活動の展開のためには、子どもたちの将来を見通して、これからの子どもたちに必要な力を想定するのです。

先が見えたら、教育はより確実に子どもを幸せに導くことができるのと思うのです。

また、最近思うことがあります。

教育相談についてです。相談員や教職員は、子どもや保護者から子どもの成長や教育に係る問題について、よく相談を受けます。

相談者の側からすると、話を聞いてもらいたいという思いがまずありますが、相談したことにより先が見えたら、相談してよかったと思うことでしょう。もし、そうでなかったら、相談してもどうにもならないと、不安が募ったりするのです。

相談することによって、先が見通せて、できれば対応の方策が分かれば、相談者は、満足することでしょう。

私は、不透明な時代であるからこそ、教育は、先を見通して、実践することが重要だと思うのです。真に、子どもたちの今と将来のしあわせのために、先が見えたらというより、先を見通して教育を進めることが大切だと思うのです。

私たち大人は、これからの時代に通用するかは別としても、これまで経験から、子どもたちより先を見通すことができます。だからこそ、子どもたちへの責任として、先を見通して子どもを育てることを真剣に考えなければならぬのです。

次回は、「あめふりばなこ」と題して、私の思い出を話してみたいと思います。